

中興の祖・蕪村における滑稽

飯塚ひろし

芭蕉没後、俳諧は低落混迷を深めたが蕪村を中心とするはいかい中興運動により、再び俳諧は息を吹き返した。

蕪村は人にとっての「現実」が映像や情緒を纏って存在する世界であることを強調した。それは蕪村が芭蕉や一茶に優る詩的想像力を備えていた証明でもある。

空想的なファクターが多く、それが蕪村の俳諧の基調をなしている。自然をも人生をも絵画として眺め常に傍観的な態度に終始した。

蕪村は「郷愁の詩人」と呼ばれたが画業に没頭し、技量を磨き、後世に現代俳画の先達の地位を築いた人である。

「春の海ひねもすのたりのたりかな」 蕪村

この作品は蕪村の俳諧の中で最も世に知られている。

穏やかな海、波が物憂く、静かに寄せては返す。

「ひねもす」には日永の情景がよく表出されている。

また、「のたりのたり」には静かにうねっている春の海を表現するに適切な措辞である。春の海を観てむいる蕪村自身が一日中、「のたりのたり」していると想像すると可笑しさが込みあげてくる。

「春雨やものがたりゆく蓑と笠」 蕪村

蕪村には春雨の句が多い。

画人蕪村らしい傍観的な作品で「春雨の中、蓑を着た人物と笠をかざして人物が並び、語り合いながら歩いている」はそのまま広重の版画を想起させる。

その人物がどんな職業かなど、想像すると実に嬉しい。

人物は武士と町人か。いや遊女と農夫のふたりの会話であつたりすると可笑しみが湧いてきて実に愉快である。

「月天心貧しき町を通りけり」 蕪村

津軽まで及んだ蕪村の放浪の旅は敬慕してやまなかった芭蕉の足跡を辿るものであった。飢餓が続いていた時代にあつて、蕪村は自らを貧民と位置づけていた。

貧しき町と言うが通りすがりの蕪村もまた、貧しく、乞食の風体であつたかも知れず、これはブラックユーモアに他ならない。放浪の蕪村が貧しき町」と断定したのは、可笑しくもうり寂しさの極みでもある。

「老が恋わすれんとすればしぐれかな」 蕪村

人間幾歳になつても心ときめかす恋は必要。

時雨はさっと降ってはさっと上がる雨で老いらくの恋も儂く短い。

恋は切なく成就し難いものだが、蕪村の恋の相手はきっと手練手管に長けた後家かも知れない。古今時雨の句は多いが、老いらくの恋を詠んだものは珍しく、切実な思いは簡単に忘れられるものではなく、蕪村の恋はおそらく失恋であり、可笑しさとペースが同居する展開である。

人の失恋は大いに笑えるものである。

蕪村の作品は「傍観的」「知識的」とかとか「絵画的」「空想的」か卑属な表現で括れるものではない。

それは夢想の営みに鋭敏な「内的風景派」という呼び名こそ、詩画両道の蕪村には相応しい。洒脱な南画風な絵を描く画人という意味で、蕪村の俳諧は非常に豊かで面白い。

一茶にも共通するが、童画のような、また装飾画を彷彿させる作風である。

/// end